

(特集：ワークショップ (第29回年次学術集会より))

序文 (巻頭言)：ワークショップ 1 「臨床医が臨床検査に求めるもの」

櫃本 泰雄

Preface: Workshop 1 “The subject of what clinicians require for clinical testing”

Yasuo Hitsumoto

Summary The 29th Annual Meeting of Analytical Bio-Science Society was held in Okayama, Japan from February 9 to 10, 2019. In the workshop I, three clinical doctors provided topics on the subject of what clinicians require for clinical testing. Dr. Masaru Kinomura introduced the concept of acute kidney injury. Dr. Kazufumi Nakamura insisted the usefulness of electrocardiography and ultrasonography in daily medical care in cardiovascular internal medicine. Dr. Seishi Terada talked about the role of laboratory technicians as part of team medicine.

Key words: Acute kidney injury, Electrocardiography and ultrasonography, Collaborative medicine

第29回生物試料分析科学会年次集会は、2019年2月9日(土)、10日(日)の2日間、岡山県岡山市の岡山理科大学構内で開催されました。この学術集会では、「ハレの国からのメッセージー Technologyの発展とScienceを見据えて」というテーマのもとに、最新の基礎的研究に関する話題を集めた特別講演と、感染症に関するシンポジウム、そして2つのワークショップなどが企画されました。ここでは、「臨床医が臨床検査に求めるもの」と題したワークショップ 1で御提供頂けた、いずれも現在岡山大学病院等でご活躍の臨床分野の先生方3名によるご講演内容を紹介します。

まずは、岡山大学病院血液浄化療法部の木野村賢先生から、「急性腎障害 (AKI) 診療における臨床検査への期待」ということで、急性腎

不全 (ARF) に至る初期のバイオマーカーを中心に講演いただきました。ARFは患者の生命予後に直結する重要な病態であるにも拘らず、今日まで統一した定義や診断基準がありません。近年、ARFに至る前段階としてのAKIという疾患概念が提唱され、その定義を中心に検討が進められてきました。そこでは、従来からの腎機能マーカーであるクレアチニンやGFR、尿量などの数値を、より厳密に評価する試みがなされて来ました。それに加え、N-acetyl- β -D-glucosaminidaseや β 2 microglobulin、 α 1 microglobulinおよびCystatineなど多くの有用なバイオマーカーが注目されています。本論文では、それらに関する情報がより詳細に示されています。AKI、ARFの診断・治療は、臨床検査データなしには語れません。臨床医は、正確で

岡山理科大学理学部臨床生命科学科
〒700-0005岡山県岡山市北区理大町1-1
E-mail: hitsumot@dls.ous.ac.jp

Department of Life Science, Faculty of Science,
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama, 700-0005, Japan

迅速な検査データ提供はもちろんのこと、より総合的な視野に立った検査方針決定の場でも、臨床検査技師との有意義なコラボレーションを必要としています。

次は、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科循環器内科学の中村一文先生による「循環器内科医が生理検査に期待するもの—無くてはならない心電図・超音波—」というご講演です。中村先生は、主に心疾患をご専門とされていますが、ここでは主としてECGと超音波検査についてお話をしました。本講演要旨には、提示された症例の一部が示され、急性心筋梗塞や不整脈発作でのECG、超音波検査の有用性が強調されています。循環器疾患では、しばしば患者の容態が分秒刻みで変化します。検査技師に求められている資質は大変大きいものと思われます。

最後に、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経病態学の寺田整司先生による「臨床医が臨床検査に期待するもの～精神科領域から」というご講演です。精神神経科では、扱う疾患の特殊性から、あまり一般的な臨床検査との関連で話題になることは少ないかも知れません。そこで、今回の学会では敢て精神科と臨床検査との接点についてお話をしたいと思い、寺田先生にお願いしました。本論文では、先生ご自身の手で検査されたかつての体験が語られ、その

ような技術の習得を手伝ってくれた検査技師さんへの感謝の気持ちが綴られています。またこれからの診療におけるチーム医療の一員としての検査技師の役割についても触れられ、今後大きく変化するであろう医療についての展望と、検査技師への期待が述べられています。

医学・医療の現場で良質の仕事ができるかどうかは、患者を中心に、医師、看護師、検査技師、栄養士、理学療法士などの医療スタッフがどれだけシステムティックに動けるかにかかっています。それは、良好な人間関係に支えられた共同作業であり、どの立場の人であっても、常に全体の流れを見据えてことに当たる必要があります。

今回取り上げました臨床医と臨床検査技師の関係は、ほとんど同業者といえるぐらいのものですが、それでも互いによく分からない部分も多々あります。臨床の第一線で活躍の、それぞれの専門分野の先生方が、臨床検査技師、あるいは臨床検査そのものにどのような想いを持っておられるか的一端をお聞きできたことは、私たちにとって大変有意義なものでした。今後とも、折りに触れてこういった機会を設けて頂き、それぞれの立場の方々のお話が聞けることを期待いたします。